

雪の上のおじいさん

小川未明

青空文庫

ある村に、人のよいおじいさんがありました。ある日のこと、おじいさんは、用事があって、町へ出かけました。もう、長い間、おじいさんは、町に出たことがありませんでした。しかし、どうしてもいかなければならない用事がありましたので、つえをついて、自分の家を出ました。

おじいさんは、幾つかの林のあいだを通り、また広々とした野原を過ぎました。小鳥が木のこずえに止まって鳴いていました。おじいさんは、おりおりつえをとめて休みました。もう、あたりの圃はさびしく枯れていました。そして、遠い、高い山々には、雪がきていました。おじいさんは早く町へ行って、用事をすまし

て帰ろうと思ひました。

村から、町までは、五里あまりも隔たつていました。その間は、さびしい道で、おじいさんは、あまり知つてゐる人たちにも出ありませんでした。

やつと、おじいさんは、昼すこし過ぎたころ、その町に入りました。しばらくきてみなかった間に、町のようすもだいぶ変わつていました。おじいさんは、右を見、左をながめたりして、驚いていました。それもそのはず、おじいさんは、めつたに村から出たことがなく、一日、村の中で働いていたからであります。

「私が、くわを持つて、毎日、同じ圃を耕している間に、町はこんなに変つたのか、そして、この私までが、こんなに年をと

つてしまった。「と、おじいさんは、独り^{ひと}ため息^{いき}をもらしていたのです。

「私は、遊び^{あそ}に町^{まち}へ出たのでない。早く用事^{ようじ}をすまして、暗^{くら}くないといううちに、村^{むら}まで帰^{かえ}らなければならぬ。」と、おじいさんは思^{おも}いました。

そこで自分^{じぶん}のたずねる場所^{ばしょ}をさがしていますと、公園^{こうえん}の入り口^{ぐち}に出^でました。

公園^{こうえん}には、青々^{あおあお}とした木^きがしげっていました。人々^{ひとびと}が忙^{いそ}しそうに、その前^{まえ}を通^{とお}り抜^ぬけて、あちらの方^{ほう}へいつてしまうものもあれば、また公園^{こうえん}の中^{なか}へ入^{はい}ってくるもの、また、そこから出^でてゆくものなどが見^みえました。しかし、その人々^{ひとびと}は、みんな自^じ

分ぶんのことばかり考かんがえて、だれも、その入り口ぐちのそばの木きの下したに立たつて、しくしくと泣ないている子供こどものあることに気きづきませんでした。またそれに気きがついても、知しらぬ顔かおをしてゆくものばかりでありました。

このおじいさんは、しんせつな、人にん情じょう深ぶかいおじいさんで、村むらにいるときも、近きん所じよの子供こどもらから慕したわれているほどでありましたから、すぐに、その子供こどもの泣ないているのが目めにつきました。「なんで、あの子こは泣ないているのだらう。」と、おじいさんは思おもいました。けれど、おじいさんは、用よう事じを急いそいでいました。そして、早はやく用ようをたして、遠とほい自分じぶんの村むらに帰かえらなければなりませんのでした。いまは、それどころでないと思おもったのでしよう。その子こ

供どものことが気きにかかりながら、そこを通り過とおぎてしまいました。

しかし、いいおじいさんでありましたから、すぐに、その子供こどものことを忘わすれてしまうことができませんでした。いつまでも、子供こどもの姿すがたが目めに残のこっていました。

「あの子こは、なんで泣ないていたのだろう。母は親おやにでもまぐれたのか、それとも、友ともだちを見失みうしったのか。よくそばへいって、聞きいてみればよかった。」と、おじいさんは、日ひごろ、やさしい心こころにも似にず、情つれなく、そこを通り過とおぎてしまったのを後悔こうかいいたしました。

「それは、そうと、私わたしのたずねていくところがわからない。」と、おじいさんは、あちらこちらと、まごまごしていました。そして、

おじいさんは、昔、いったことのある場所を忘れてしまって、幾い
くに人となくすれ違った人々に聞いていました。

「あのあたりで聞いてごらんなさい。」などといいのこして、さ
つさといつてしまふものばかりでありました。

おじいさんは、うろうろしているうちに、またさびしいところ
へ出てしまいました。そこは、先刻その入り口の前を過ぎた、同
じ公園の裏手になっていました。青々とした常磐木が、うす
曇つた空に、風に吹かれて、さやさやと葉ずれがしています。弱
い日の光は、物悲しそうに、下の木や、建物や、その他のす
べてのものの上を照らしていました。

「また、公園のところへ出てしまったか。」と、おじいさんは、

もどかしそうにいいました。

すると、すぐ目先に、鉄のさくに寄りかかって、さつき見た六つばかりの男の子が、しくしく泣いていました。これを見ると、おじいさんはびっくりしてしまいました。

おじいさんは、なにもかも忘れてしまいました。そして、すぐに泣いている子供のそばに近寄りました。

「坊は、どうして泣いているのだ。」と、おじいさんは、子供の頭をなでながら聞きました。

「お家へ帰りたい。」と、子供は、ただいって泣いているばかりでした。

「坊やのお家はどこだか？ 私がつれて行ってやるだ。」と、お

じいさんは田舎言葉でいいました。

しかし、子供は、自分の家のある町の名をよく覚えていませんでした。それとも、悲しさが胸いっぱい、問われてもすぐには、頭の中に思い浮かばなかったものか、

「お家へ帰りたい。」と、ただ、こういつて泣いているばかりでありません。

おじいさんは、ほんとうに困ってしまいました。それにしても、さつきから、この子供はこの公園のあたりで泣いているのに、だれも、いままで、しんせつにたずねて、家へつれて行ってやるうというものもない。なんという町の人たちは、薄情なものばかりだろう。それほど、なにか忙しい仕事があるのかと、おじ

いさんは不思議に感じたのでした。

「お家へ帰りたい。」

子供は、こういつて泣きつづけていました。

「ああ、もう泣かんでいい。私が、坊やをつれていつてやる。」
と、おじいさんは、子供の手を引いて、その鉄さくから離れま
した。

「坊や、困ったな。お家のある町がわからなくては。」と、おじ
いさんは子供をいたわりながら、小さな手を引いて歩いてきまし
た。すると、あちらに、風船球売りがいて、糸の先に、赤いの
や、紫のをつけて、いくつも空に飛ばしていました。

「どれ、坊やに、風船球をひとつ買ってやろう。」と、おじい

さんはいいました。

子供は、見ると、ほしくて、ほしくてたまらない、紫のや、赤いのが、風に吹かれて浮かんでいましたので、泣くのをやめて、ぼんやりと風船球に見とれていました。

「赤いのがいいか、紫のがいいか。」と、おじいさんは聞いていました。

「赤いのがいいの。」と、子供は答えた。

「風船球屋さん、その赤いのおくれ。」と行って、おじいさんは、懐から大きな布で縫った財布を出して、赤いのを買ってくれました。

「飛ばさないように、しっかり持つていくのだ。」と、おじいさ

んはいいました。

二人は、また、そこから歩きまわりました。

子供は、風船球を買って、そのうえ、おじいさんが
ひじょうにしんせつにしてくれますので、もう泣くのはやめてし
まいました。そして、とぼとぼとおじいさんに手を引かれて歩い
ていました。

「坊や、おまえは、どっちからきたのだ。」と、おじいさんは、
こごんで子供の顔をのぞいてききました。

子供は目をくるくるさして、あたりを見まわしました。けれど、
子供もこの辺へきたのは、はじめてだとみえて、ぼんやりとして、
ただ驚いたように目をみはっているばかりであります。

「坊は、歩いてきた道を覚えていられるだろう、どちらから歩いてきたのだ。」と、おじいさんは、やさしくたずねました。

子供は、再三おじいさんに、こうして問われたので、なにか返事をしなれば悪いと思つたのか、

「あつち。」と、あてもなく、小さい指で、にぎやかな通りの方を指したのです。

「坊は、きた道を忘れてしまったのだろう。無理もないことだ。なに、もうすこしいつたら巡査さんがいるだろう。」と、おじいさんはいいました。

「おじいさん、巡査さんは、いやだ。」と、子供はいつて、またしくしくと悲しそうに泣き出しました。

おじいさんは、急きゆうにかわいさを増ましました。また、巡おまわり査さと聞きいて、泣なき出だした子供こどもを見みておかしくなりました。

「よし、よし、巡おまわり査ささんのところへはつれてゆかない。おじいさんが、お家うちへつれていってやるから泣なくのじやない。ほら、みんなが笑わらっているぞ。」と、おじいさんはいいました。

公こう園えんの方ほうで、鳥とりのないている声こえが聞きこえました。空そらを見みると、曇くもっていました。そして、寒さむい風かぜが吹ふいていました。

おじいさんは、ほんとうに困こまっていました。どうしたら、この子供こどもを家うちへとどけてやることができるだろうかと思おもいました。子供こどもの親おやたちが、どんなに心しん配ぱいしているだろう。そう思おもうと、早はやく、子供こどもをあわしてやりたいと思おもいました。どうして、この子こ

ども
 供は、こんなところへ迷^{まよ}つてきたろう。この近^{きんじよ}所の子供^{こども}なら、
 自分^{じぶん}の家^{うち}の方角^{ほうかく}を知^しつていそうなものだがと、おじいさんは、
 いろいろに考^{かんが}えました。

しかし、世間^{せけん}には、怖^{おそ}ろしい鬼^{おに}のような人間^{にんげん}がある。自分^{じぶん}が
 苦^{くる}しいといつて、子供^{こども}を捨^すてるような人間^{にんげん}も住^すんでいる。そん
 な人^{ひと}の心^{こころ}はどんなであらうか。

「坊^{ぼう}は、おじいさんの家^{うち}の子供^{こども}になるか。」と、おじいさんは、
 笑^{わら}いながらききました。

「なつたら、また、風船球^{ふうせんだま}を買^かつてくれる？」と、子供^{こども}は、お
 じいさんの顔^{かお}を見上^{みあ}げました。

「ああ、買^かつてやるとも、いくつも買^かつてやるぞ。」と、おじい

さんは、大きなしわの寄った掌で子供の頭をなでてやりました。おじいさんは、幾十年となく、毎日、圃に出てくわを持つていたので、掌は、堅く、あらくれだつていましたが、いま子供の頭をなでたときには、あたたかい血が通つていたのであります。

このとき、あちらからきちがいのように、髪を振り乱して、女が駆けてきました。

「坊や、おまえはどこへゆくのだい。」と、母親は子供をしかりました。

子供は、またお母さんに、どんなにひどいめにあわされるだろうかと思つたのでしよう、急に大きな声で泣き出しました。

「そんなら、このお子供さんは、あなたのお子さんですかい。」

と、おじいさんは女おんなの人にききました。

「私わたしの子供こどもでないかもないもんだ。朝あさから、どんなさかに探さがしたこと

ですか、警けい察さつへもどけてありますよ。」と、女おんなはいいました。

「さあ、坊ぼうや、お母かあさんといっしょにゆくだ。」と、おじいさん

はいいました。

子供こどもは、ただ泣ないていて、おじいさんのそばそばを離はなれようとしま

せん。

「おまえは、どこへゆくつもりだい。」と、母は親おやは怖おそろしい目め

をしてどなりました。

「おじいさんといっしょにゆくのだ。」と、子供こどもは泣なきながらい

いました。

「おじいさん、この子をどこへつれてゆくつもりですか。」と、
 母親ははおやは、おじいさんに向むかつて腹はらだたしげに問といました。

おじいさんは、なんときいう氣きのたつた女おんなだろう。子供こどもがこれではつかないはずだ。きつと家うちがおもしろくなくて、それであてもなく出でて歩あるいているうちに道みちを迷まよつてしまつたに違ちがいない。それにして、あんまり優やさしみのないところをみると、継母まははであるのかもしれないぞと、おじいさんは、いろいろに考かんがえましたが、こんな女おんなには、わかるようにいわなければだめだと思おもつて、ここまで自分じぶんが子供こどもをつれてきたことをすつかり話はなして聞きかせたのです。

すると、どんな氣きのたつた女おんなでも、おじいさんのしてくれまし

んせつに對して、お礼をいわずにはいられませんでした。

「それは、ほんとうにお世話さまでした。さあおまえは、こちらへおいで。」と、母親は、おじいさんに礼をいいながら、子供の手を引つ張りました。

「さあ、お母さんとゆくのだ。」

おじいさんは、目に涙をためて、子供を見送りながらいいました。

子供は、振り返りながら、母親に連れられてゆきました。そして、その姿は、だんだんあちらに、人影に隠れて見えなくなりました。おじいさんは、ぼんやりと、しばらく見送つていましたが、もういつてしまった子供をどうすることもできませんでし

た。また、いつかふたたびあわれるということもわからなかったのです。

おじいさんは、自分の用事のことを思い出しました。そして、また自分のゆくところをたずねて、町の中をうろついています。ちようど、年寄りのまい子のように、おじいさんはうろろうろしていたのであります。

「ああ、今日は、もう遅い。それに降りになりそうだ。早く、村へ帰らなければならん。」と、おじいさんは思いました。

おじいさんは、また、自分の村をさして帰途についたのであります。途中で、日は暮れかかりました。そして、とうとう雪が降ってきました。

それだけでなくさえ、目のよくないおじいさんは、どんなに困つたでしょう。いつのまにか、どこが原だやら、小川だやら、道だやら、ただ一面真っ白に見えてわからなくなりました。

おじいさんは、つえをたよりに、とぼとぼと歩いてゆきました。そのうちに、風が強^{かぜ}く吹^{つよ}いて、日^ひがまったく暮^くれてしまったのです。

まだ、村^{むら}までは、二里^りあまりもありました。朝^{あさ}くるときには、小鳥^{ことり}のさえずっていた林^{はやし}も、雪^{ゆき}がかかつて、音^{おと}もなく、うす暗^{ぐら}りの中^{なか}にしんとしていました。

かわいそうに、おじいさんは、もう疲^{つか}れて一歩^ぽも前^{まえ}に歩^{ある}くことができなくなりました。だれかこんなときに、通^{とお}りかかつて、自^じ

ぶんむら
分を村までつれていってくれるような人はないものかと祈つてい
ました。

ゆき
雪は、ますます降つてきました。おじいさんは、雪の上うへにすわ
つて、目めをつぶりました。そして、一心しんに祈いのつていました。

すると、たちまちあちらにあたつて、がやがやと、なにか話はなし
合あうようなにぎやかな声こえがしました。おじいさんは、なんだろう
と思おもつて、目めを開あけてその方ほうを見みますと、それは、みごとにも、
ほおずきのような小ちひさな提ちようちん燈とうを幾いくつとなく、たくさんにつけ
て、それをばみんなが手てに手てにふりかざしながら、真まつ暗くらな夜よるの
中なかを行ぎ列ぎようれつをつくつて歩あるいてくるのです。

「なんだろう……。」と、おじいさんは、目めをみはりました。そ

の提燈ちようちんは、赤あかに、青あおに、紫むらさきに、それはそれはみごとなもの
 ありました。

おじいさんは、この年としになるまで、まだこんなみごとな行ぎょうれ
 列れつを見たことがなかったのです。これはけっして人間にんげんの行ぎょう
 列れつじゃない。魔物まものか、きつねの行ぎょうれつ列れつであろう。なんにして
 も、自分じぶんはおもしろいものを見るみものだど、おじいさんは喜よろこんで、
 見みていました。

すると、その行ぎょうれつ列れつは、だんだんおじいさんの方ほうへ近ちかづいて
 きました。それは、魔物まものの行ぎょうれつ列れつでも、また、きつねの行ぎょうれ
 列れつでもなんでもありません。かわいらしい、かわいらしいお
 ぜいの子供こどもの行ぎょうれつ列れつなのであります。

その行^{ぎょう}列^{れつ}はすぐ、おじいさんの前^{まえ}を通^{とお}りかかりました。子供^{こども}らは、ぴかぴかと光^{ひか}る、一つの御輿^{みこし}をかついで、あとのみんなは、その御輿^{みこし}の前後^{ぜんご}左右^{さゆう}を取^とり巻^まいて、手^てに、手^てに、提^{ちよう}燈^{うちん}を振りかざしているのです。おじいさんは、だれが、その御輿^{みこし}の中^{なか}に入^{はい}っているのだらうと思^{おも}いました。

このとき、この行^{ぎょう}列^{れつ}は、おじいさんの前^{まえ}で、ふいに止^とまりました。おじいさんは不思議^{ふしぎ}なことだと思^{おも}って、黙^{だま}って見^みていますと、今日^{きょう}、町^{まち}で道^{みち}に迷^{まよ}って、公園^{こうえん}の前^{まえ}で泣^ないていた子供^{こども}が、列^{れつ}の中^{なか}から走^{はし}り出^でました。

「おお、おまえかい。」といって、おじいさんは喜^{よろこ}んで声^{こゑ}をあげました。

「おじいさん、僕が迎えにきたんです。」と、その子供はいいま
すと、不思議なことには、いままで五つか、六つばかりの小さな
子供が、たちまちのうちに十二、三の大きな子供になつてしま
いました。

「さあ、みんな、おじいさんを御輿の中に入れてあげるのだ。」
と、子供は、大きな声で命令を下しますと、みんなは、手に、
手に、持っている提燈を振りかざして、

「おじいさん、万歳！」

「万歳！」

「おじいさん、万歳！ 万歳！」

みんなが、口々に叫びました。そして、おじいさんを御輿の

中なかにかつぎこみました。

「さあ、これから音楽おんがくをやつてゆくのだ。」と、例れいの子供こどもは、また、みんなに命令めいれいをしました。

たちまち、いい笛ふえの音色ねいろや、小さちいならつぱの音ねや、それに混まじつて、歩調ほちようを合あわし、音頭おんどをとる太鼓たいこの音おとが起おこつて、しんとしたあたりが急きゆうににぎやかになりました。

おじいさんは、うれしくて、うれしくて、たまりませんでした。そつと輿こしの中なかからのぞいてみますと、あの子供こどもが、みんなを指揮しきしています。そして、みんなが口々くちぐちに、なにかの歌うたをかわいらしい声こえでうたいながら行儀ぎようぎよく、赤あか・青あお・紫むらさきの提燈ちようちんを振ふりかざして歩あるいてゆきました。

—
一九二一・一二作—

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1922（大正11）年1月

※表題は底本では、「雪《ゆき》の上《うえ》のおじいさん」となっています。

※初出時の表題は「雪の上のお爺さん」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の上のおじいさん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>